

# 土佐の堅田一族 (五)

高知県須崎市吾井郷乙

堅田 貞志

堅田小三郎貞貞守軍忠平五平傳信工月三日  
奉為守押守押守大高坂村而大平橋向於倉運  
早致軍忠之度今月吉日午後故花園宮新田傳村  
入道殿全淳在時時性走難寺近藤邸即左衛門尉  
和全德四守有十又三郎河向左衛門以弟佐河四郎左  
衛門入道屋留野太守入道大野仲村名主座宮下  
山後守空致十郎守米取陸其湘江少之河所也  
本傳林平致散全致殊貸致十人出後之特遊藤  
弟左衛門尉若曾主致野林九郎外取住十坊守泥守  
守傳守平一司三郎深宮我台二門守合致之向今見和  
上者否後謹可賜新利權於以此旨可有林被致儀  
恐化謹言

暦應三年三月八日

依傳傳史

逸上 實筆抄



土佐南北朝動乱で大活躍したのは堅田（佐伯）小三郎  
経貞であったが、大高坂での負傷が悪化して死亡したも  
のか、功績による恩賞はすべて弟の又三郎の名前になっ  
ている。

暦應三年（一三四〇）の暮一二月には吾河山の領所職  
と兵糧を宛てがわれ、また同日、久佐賀（目下）にある  
別府彦九郎入道が領した田地をも与えられている。

## 動乱後の海辺荘

開荘以来二〇〇年余り続いた海辺荘の堅田氏（佐伯）  
は、津野経高氏が土佐国州崎浦に上陸した時より、津野  
氏の目の上のコブの存在であった。

海辺荘主として城を吾井郷より新荘岡本に移しての堅  
田氏の勢力は、津野氏と対等のものを持っていたと思わ  
れる。

その堅田氏を亡ぼし、土佐中央部の重要な地点である  
海辺荘を手中に納めることが、津野氏入国以来代々の念  
願であった。

土佐南北朝動乱の終結を機会に、恩賞地によって堅田

一族の勢力を分散し、家臣として自らの支配下に組み込んでしまったのである。



新庄岡本城付近地図

### 岡本城攻撃さる

『佐伯文書』

堅田又三郎国貞申 自当国初合戦 奉属干御手 随分抽忠勤候之上 今月廿六日 花園宮御手人々金沢殿 綿打殿 越智 佐川 度賀野軍勢 戸波名主庄官並態野山凶徒等 当陣津野新庄岡本城寄来之時致散々合戦之刻 国貞嫡子堅田弥三郎 於当座討死仕候了 勝津野惣領一族以下数輩御見知之上者 為向後可賜御証判候哉 以此旨有御披露候

恐惶謹言

康永元年九月廿六日

佐伯国貞

進上御奉行所

承了(花押)

右読み下し

堅田又三郎国貞申す。当国より合戦初め、御手に属し奉り、随分と忠勤を抽し候の上、今月二六日、花園宮御手人々、金沢殿、綿打殿、越智、佐川、度賀野の軍勢、戸波の名主・庄官、並びに熊野山の凶徒等。当陣、津野新庄岡本城に寄せ来たる時、散々合戦致すの刻、国貞の

嫡子、堅田弥三郎が当座において討死仕り候おわんぬ。且、津野の総領一族以下数輩、御見知の上は向後の為、御証判を賜るべく候や。もつてこの旨、御披露あるべく候。

『佐伯文書』

明日三日可相攻 佐河四郎左衛門入道城也 津野三宮 佐竹人々与致同心合力 且卒一族 且可被抽戦功之状如件

康永式秋九月二日

僧(花押)

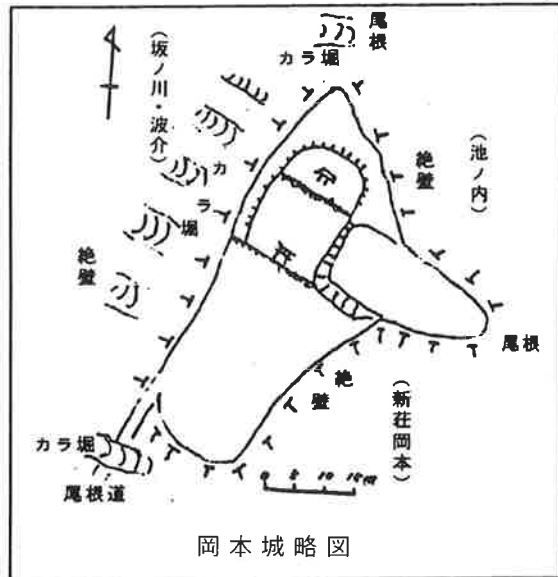
方田又三郎殿

※僧とは細川権律師定禪のこと

右読み下し

明日三日、相攻めるべく、佐河四郎左衛門入道城也、津野三宮、佐竹の人々と与、同心合力致し、且つ一族を率い、且つ戦功を抽せらるべく、の状、件の如し。

大高坂城が陥落し、南朝に味方したそれぞれの領主たちは、戦死した者、捕らわれた者、かろうじて落ち延び草深い山奥に身を隠した者、等々であった。



岡本城略図

年老いた父大平弾正光圀を伴って、大毘羅山(現在の川町大平)の奥深く落ちのびた越智新兵衛光孝は、家来の助けをうけて細々と暮らしていた。

行方不明になっていた斗賀野又太郎、佐河四郎左衛門等は密かに光圀のもとに集まり、今一度の挽回を期して計画を練った。その結果、散りじりとなっている一族郎

党を集めて、堅田一族の本拠地岡本城を夜討ちすることになった。

新兵衛光孝は伊予久間山で山伏をかり集め、斗賀野又太郎、佐川四郎左衛門は戸波、浦ノ内方面で二百人近い軍兵を集め、それに大高坂の残党も加わり結集した。

時は、南朝軍が破れて二年後、康永元年（一三四二）九月二五日、夜を期して三百余人の軍勢は、岡本城へ夜襲をかけた。

城主堅田又三郎は子弥三郎に留守を頼み不在であった。不意をつかれた弥三郎は、慌てふためき狼狽する家来を指揮し防戦したが、越智新兵衛光孝に切りつけられ、ついに戦死した。

勝ち誇った越智新兵衛等は、佐川大毘羅山の老父弾正のもとに帰り、凱旋を喜び合ったが、束の間、追手を避けて国外へ逃亡した。

京都の細川権律師定禅が南朝方の残党掃討命令を発したのは、弥三郎が戦死してから一年後の康永二年（一三四三）九月二日のことである。

越智新兵衛は佐川、黒岩などの各地を逃げ回っていたが、康永三年春、高岡の蓮池城主大平国助を頼りに、日

下より山越えして高岡へ逃げる途中、火伏峠で三宮実綱に発見され殺された。

大平弾正光圀は、数人の家来と大平山の人里はなれた山奥に身を隠していたが、息子孝光が堅田又三郎の追手に殺害されたことを知り、七五才の老齢をもって切腹して果てた。

ここに南朝方の再興の夢は消え去ったのである。



## 堅田経貞と佐伯氏との関係

土佐の南北朝時代の立役者、堅田（佐伯）小三郎経貞なる人物について、寺石社山は次のように書いている。

「曆応・康永前後、土佐国武家方の勇将として、且つ古文書の人物として有名なる堅田小三郎経貞は、土佐国高岡郡津野・新莊・岡本城辺を根拠とし、大高坂城の南軍と戦いしは、古史に顕著なる史実である。然るにこの佐伯経貞は如何なる系統、出自の人なるやは、史料欠乏で十分に明白に知れなかつたが、ここに不思議のことより、その出所の曙光をかすかに認め得るに至つたは面白きことである。」

と書きはじめ『土佐名勝志』を次の通り引用している。

「経貞は惟貞の誤字かと存じられ候。佐伯氏は本国豊後海部郡佐伯庄、堅田村、梅牟礼城主大神姓（紋所左三三巴）堅田小三郎惟貞なりと存じ候。南北朝の時、豊後守護大友氏の幕下に属し、武家方の急先鋒たりき。故に土佐国に渡り、同志を指揮または糾合して宮方に抗したるならん。土佐には一条家の莊園もあることなれば、足利氏これを危険視し、己に随一の味方なる大友氏に命令を下し

たるにあらざるやと思わる。佐伯氏は後、豊後に帰還したるに相違なし。云々」

寺石社山は、大分県出身で裁判所検事などを歴任した尾方維孝氏との文通により、次の通り書いている。

「あえて尾方氏の報知によれば、『佐伯庄の中に堅田村あり、また佐伯氏の代々居城梅牟礼城址は、今に佐伯町の西方一里にその古跡を存しているという。土佐国堅田小三郎経貞は、その名前から言うも、右の豊後佐伯庄堅田村出身の人たる殆ど疑うを容れぬと思う。さりながら豊後に存する佐伯惟貞とは名に一字の相違あり、惟と経と文字極めて似たるも、一字の違いある以上は、直に同人と認めることはできぬ。もし土佐の記録（佐伯文書）が全部写本なれば、あるいは誤写と見得べきも、土佐には曆応三年の古文書現存し、その文書の著名は経貞にあれば間違つてはいない。余は佐伯経貞と佐伯惟貞とは極めて名の似た人で、確かに関係ある人と見るが、しかしそれだけで直に一人と見るは穩やかではない。先ず別人と信ずる由、云々」

また尾方氏の手紙によると

『佐伯・堅田は緒方一族三七家の内なり。思うに堅田小

三郎経貞は、本国豊後より分離して、伊予に渡り土佐に入り、遂にその地に土着したるならん。豊後の宗家と同じく足利方なりき、云々」

佐伯経貞の土佐入国は、当時四国の形勢より察するに、宮方の押えのために、伊予を経由して、土佐に来たりしならんと言う尾方氏の推定は、余もあるいは然らんと同意する次第である。

然してその後いかにとたずぬるに、文政頃高知城下に町医者佐伯杏仙というものあり。いわゆる佐伯古文書を藏せしと言え、その頃までは存在せし明らかなり。今日その子孫の存否不明なるは、遺憾なりと言うべしである。

堅田を姓とする人は、高岡郡須崎近傍に若干存在す。場所も経貞の居城津野の新莊（今の新莊村）にも近し。必ずその裔の分れしものと推定す。」

（次号につづく）

